群教セ	F09 - 01
	平17.225集

問題行動の予防に向けた教師のみとりの研究

――「かすかなサインのキャッチ」に視点を当てて ――

長期研修員　　城田　紀子

《　研究の概要　》

本研究は、総合教育センターにおける教育相談業務室の相談員及び大学院生の観察・実践を通して、不登校の前兆段階での「かすかなサインのキャッチ」に視点を当てて研究したものである。児童生徒の発するかすかなサイン（非言語的サイン）をキャッチ（気付く）することや、そこからよみとれるいろいろな心理的側面を考えることが、不登校予防さらには問題行動予防に有効である。開発した心理的側面を考えるための資料集も活用できる。

キーワード　【教育相談　問題行動の予防　非言語　サイン　気付き　みとり】

Ⅰ　主題設定の理由

学校では、現代の社会状況を反映するかのように、児童生徒の様々な問題行動が多発している。

その中の一つに不登校問題がある。保護者の願いや教師の支援にもかかわらず、なかなか成果が上がらず、解決の糸口が見いだせないでいる。また不登校になってしまうと、その複雑さゆえ、解決が困難であったり長期化してしまったりすることがある。

そこで、不登校児童生徒を出さない指導、つまり不登校予防が必要となるのである。不安を抱えている様子やつまずいている姿を、教師が早期に発見でき、できるだけ早い時期から適切な対応を行うことが大切である。

そのためには、教師が不登校の前兆段階で、児童生徒の発する「かすかなサイン」（非言語的サイン）に目を向け、それを「キャッチ」（気付き）し、心理的な内面をよみとるということが不可欠となってくる。つまり教師が、児童生徒の心のサインに目を向けるということが大切である。その「かすかなサインのキャッチ」が、敏速な対応・早期解決に近づく一方法ではないかと考えた。さらに、この考えを進めることは、問題行動予防にもつながると思われる。また日常指導においての教師の考え方・在り方の再考にもつながるものと思われる。

今年度、総合教育センター内の教育相談業務室を研究の場とする機会を得ることができた。教育相談業務室での、児童生徒や保護者に対する相談員の支援の仕方を分析・理解することにより、気付き方・みとり方・教師の在り方を見直す原点が、そこに内在しているのではないだろうかと考えた。

これらのことをふまえて、教育相談業務室での実践から学んだことを生かし、児童生徒に対する教師の気付き方やみとり方さらには教師の在り方をまとめたいと考えた。そして、得られた学びから学校現場で活用できる資料集を開発し、不登校予防さらには問題行動予防につなげたいと考えた。

Ⅱ　研究の問い

1　問いの設定

○かすかなサインをキャッチする（気付く）には、どのような観点でみていくことができればよいのであろうか
○そのサインから心理的側面をよみとるためには、どのような考え方ができればよいのであろうか
○学んだことを学校現場で生かすにはどうしたらよいのであろうか

2　研究の手順

本研究は、教育相談業務室の活動を研究の場として、次ページのような手順で行った（図１）。

まず文献研究により不登校問題解決のためのキーワードの設定を行った。

次に、教育相談業務室の活動を研究対象として選定した。そして、面接相談や電話相談をする児童生徒・保護者・教師などに対する相談員の接し方を観察・記録した。そこで得られた情報や話合いから、相談員がどのような視点で対応したり支援したりしているのかを理解・分析した。さらに、相談員自身、その視点はどのような考えに基づいているものであるのかを掘り下げてもらい、研究者は、気付くためにはどういう考え方や在り方が必要であるかを分析・解明した。

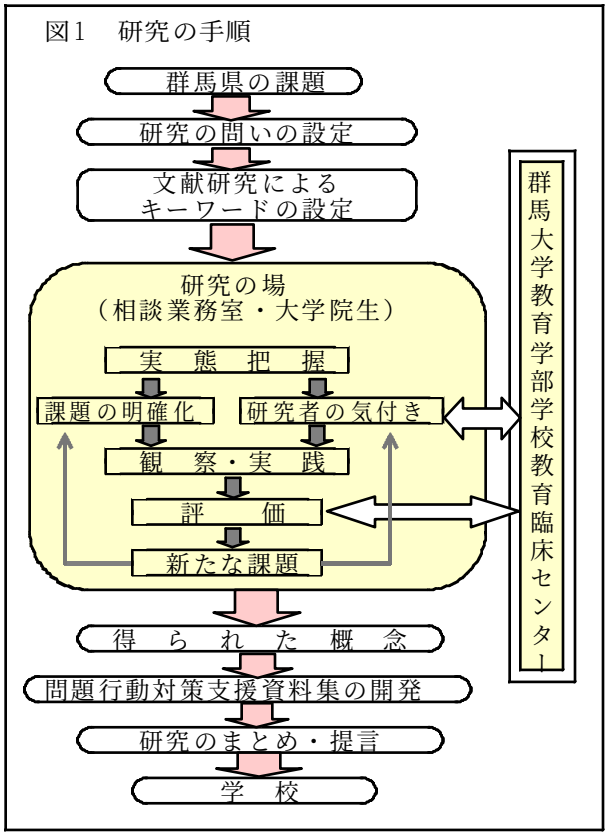
また今年度、群馬大学との事業連携として、大学院生の教育支援センター（適応指導教室）での児童生徒へのかかわり方も研究対象とすることができた。そこで研究者は、相談員から得られた気付きや成果を、研究者自身の面接相談や電話相談という実践の場に生かすだけでなく、大学院生に直接関与し、その支援にも生かすこととした。

そして大学院生の実態を把握し、研究者による支援の課題を明確化した。次に、実践を通して、その課題を解決しながら、得られたものを話し合い評価し、新たな課題につないだ。

この研究で得られた概念から、教師としての考え方・在り方を見直し、それらをさらに学校現場で生かすにはどうしたらよいかを研究することとした。そして、不登校問題に限らず、児童生徒との日常のかかわりの中で生じる様々な問題行動に、適切な対応をするための資料集の開発を目指した。

研究を進めるにあたり、群馬大学教育学部、猪股剛助教授から助言を受けた。

図1　研究の手順



3　先行研究

(1)　予防や対応の先行研究

不登校予防にかかわる研究は数多く報告されている。

「魅力ある授業の工夫」「構成的グループ・エンカウンターでよりよい仲間づくりを」など不登校を出さないための研究は、指導方法が体系化されていたり、研修でも取り上げられたりしている。学習や演習の機会もあり、教育活動にも多く取り入れられている（表２の「一次予防」にあたる）。

また、早期発見・早期対応に関しても、様々な状態に対する対応方法が研究されている。しかしその多くは、「２日欠席が続いたら電話しよう」「こういう場合は、こういう対応策をとってみよう」というスキル的な支援方法が主である（表２の「二次予防第二期」にあたる）。

群馬県総合教育センターで作成された『不登校問題課題解決支援資料』の「不登校の早期発見を目指して－心のサインに添って早期解決を図ろう－」の不登校解決プログラムは、心のサインの発見・理解・適切な対処の方法に触れている。しかし具体的な言動・行動を「サイン」ととらえたものであり、その前兆段階である「かすかなサイン」について言及しているものは見あたらなかった。

(2)　「かすかなサインのキャッチ」は未開拓分野

問題行動のサインにかかわる研究では、「服装が乱れる」「腹痛を起こす」などはっきりと表面化したことに対するものがほとんどで、「かすかなサインのキャッチ」という視点では、研究がなされていなかったり体系化されていなかったりということを知り、その段階の対応の手薄さが分かった（表２の「二次予防第一期」にあたる）。つまり「かすかなサインのキャッチ」は今まで研究がなされていない未開拓分野である。その上、教師としてどのような考えをもつことが、サインをキャッチすることにつながるのかという示唆は、ほとんど研究されていない。また、表れたサインが、心の奥にあるどのような気持ちを表している

のかということに関するものも、ほとんど見あたらなかった。

そこで、サインをキャッチ（気付く）するためには、教師がどのような考えをもっていたらよいのかということを研究することが不登校予防の一方策になると考え、この研究を進めていくこととした。さらに、そこから開発された資料集が現場の教師に生かされることで、不登校の減少だけでなく、問題行動の早期発見にもつながり、未然防止の手がかりになるであろうと考えた。

4　キーワード

(1)　予防のとらえ方（キーワード1）

不登校の過程は表１のように、時間的経過と状態像の変化にしたがって、「前兆期」「初期」「中期」「後期」「社会復帰」の五つの段階に区分されるといわれる（小澤美代子　2004年）。

本研究は、その「前兆期」を、「予防」ととらえたものである（表２）。

(2)　かすかなサインのキャッチ（キーワード2）

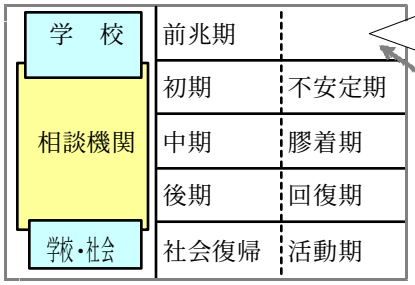
本研究では、不登校予防を進行の様子から段階的にとらえて、一次予防、二次予防とした。一次予防は「不登校を出さないためのかかわり」で、二次予防は不登校になる前の「心が揺れだしたときのかかわり」である。

二次予防をさらに二つに分け、第一期を「かすかなサインのキャッチ」とし、第二期を「早期発見・早期対応」とした。本研究は、第一期「かすかなサインのキャッチ」である。

心が揺れている児童生徒からは無意識的にまた意識的にサインが表現される。そのかすかなサインをキャッチすることが、早期発見・早期対応の糸口となり、不登校になる前の段階で早期解決へ向くことが可能になると思われる。

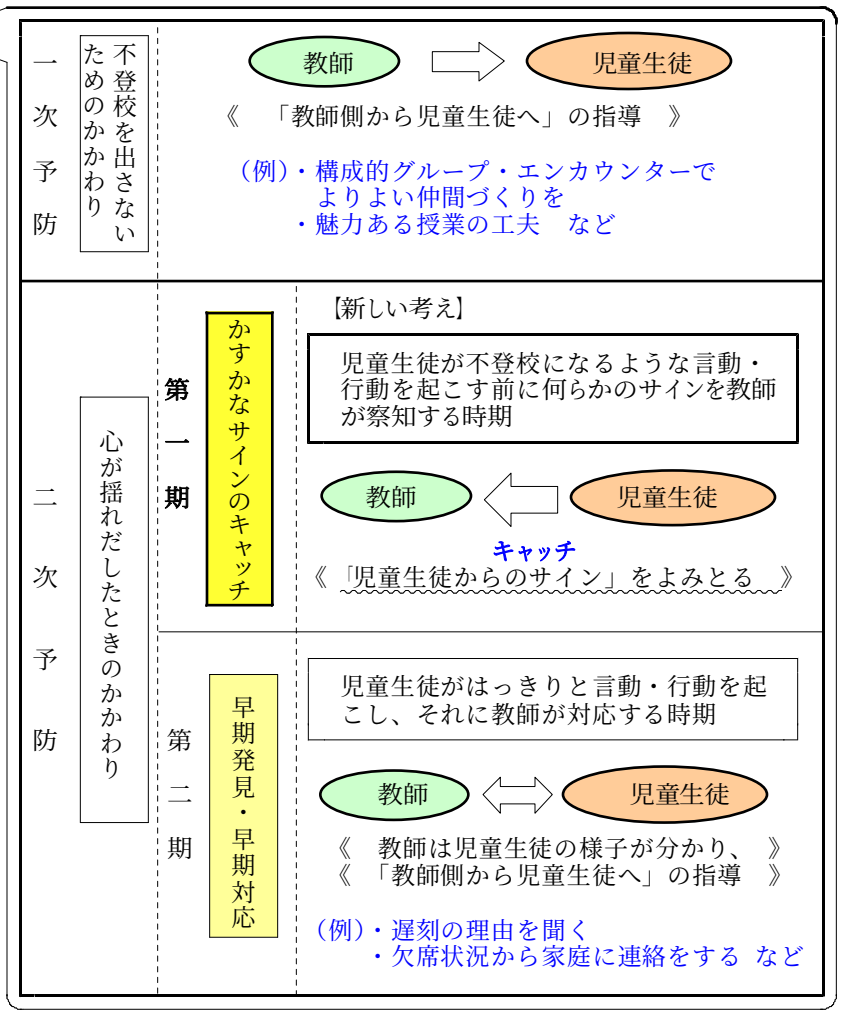
この第一期の「かすかなサインのキャッチ」を研究することにより、教師は児童生徒のどんな様子に目を向けたらよいのか、それをするために教師は何を身に付けておくことが大切なのかということを知ることができると考える。ひいてはそれ

表1　不登校の過程



不登校の援助以上に教師が考えなければならないことは、不登校を新たに出さないための工夫である。援助している間に新たな不登校が発生してしまっては、減少しにくい。また、できるだけ初期に対応することで深刻化を防ぐことができる。不登校を予防するためには、この前兆期のかかわり方が重要な対応だと考える。前兆期の段階は、学校で行うことのできる対応だからである。したがって教師がこの段階で、何らかの対策をとっていくことが、未然防止につながると考える。

表2　予防のとらえ方



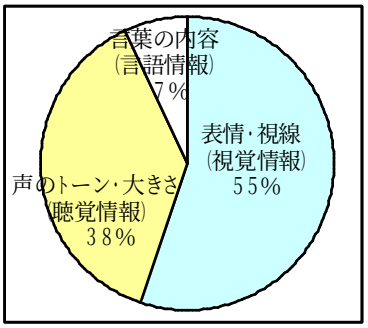
が、不登校問題解決の一方策にもつながると考える。

(3)　非言語的サイン（キーワード3）

ア　気持ちの伝わり方は視覚・聴覚情報から

子どもたちの示す様々な態度や行動も心の危機を表すサインと考える。例えば顔の表情や声の大きさ、視線、しぐさ、持ち物などである。気持ちが伝わる割合はどのくらいかというと、言語以外の非言語的なコミュニケーション（視覚情報55%と聴覚情報38%）で、93%が伝わってしまうといわれている（図２）。

図2　気持ちの伝わり方
Mehrabian.A(1971)



つまり、コミュニケーションにおいて、最も大切なのは言葉を使わない非言語的なコミュニケーション、つまり視覚・聴覚情報といえる。

イ　非言語的サインのキャッチ

学校には、様々なサインを表現している児童生徒がいる。言葉で表現された場合にはすぐに分かるが、そうでない場合には、非言語的サインを察知することが大切である（表３）。特に、問題行動を起こす児童生徒の多くは、その兆候として、何らかのサインを発していると考えることにより、サインをキャッチすることは、揺れる心に近づくことができると考える。そして、その内面からのメッセージに耳を傾けるように努めることが大切である。その声なき訴えをキャッチすることが、早期対応につながると考える。

表3　非言語的サイン

	表情や態度
授業中	・授業中の集中力が欠けてくる ・忘れ物が目立つようになる ・ノートや答案への落書きが多くなる ・授業中気持ちが悪いと訴えてくる ・保健室への出入りが多くなる ・トイレに行く回数が多くなる
休み時間	・用もないのに、教師のそばにいる ・休み時間、一人でいることが多くなる ・先生を避けるようになる
表情態度	・整理整とん、身体・髪の乱れが目立つようになる ・活気がなくなり無気力になる ・疲労感や脱力感が表れるようになる ・投げやりな態度が見られるようになる
身体表現	・笑顔が少なくなり、無表情になる ・手が震えている ・腕組みをする ・目をきょろきょろさせる ・食欲がなくなる ・あくびが多くなる

(4)　どの子にも起こりうる問題（キーワード4）

不登校は特定の子どもに特有の問題があることによって起こるのではなく「どの子にも起こりうるものである」という視点に立ってとらえる必要がある。すなわち、現在元気に通学している子どもも、様々な要因が作用して不登校に陥る可能性があるという認識をもつことが予防的観点から必要になってくる。

個々の不登校の要因・背景は多様化しており、簡単にはまとめられないが、子ども自身の意識の低下、保護者の学校に対する意識変化、社会の変化などが影響を及ぼしているのも事実である。「だれにでも起こりうる」からこそ、日常のかかわりや早期発見に力を注いでいく必要がある。

(5)　教師の果たす役割（キーワード5）

「サインをキャッチ」という視点で教師のかかわりを考えると、その果たす役割は重要である。学校生活で、前兆期にかすかなサインをキャッチするということは、より児童生徒の心に近づくことになり、効果的な指導へとつながる。

教師は、自らのかかわりが児童生徒の成長に大きく影響するということを常に自覚し、指導にあたる必要がある。

Ⅲ　研究の場からのみとりと学び

1　教育相談業務室から　みとり1

(1)　群馬県総合教育センターにおける教育相談事業・教育支援センター（適応指導教室）の概要

教育相談事業

電話相談	教育に関する様々な相談に、電話で支援する「学校教育相談」「いじめ電話相談」
面接相談	不登校やいじめなど、抱えている悩みについて子どもや保護者・教師などに面接をしながら支援する
訪問相談	不登校の悩みに応じて、家庭や学校に相談員が訪問し支援する
グループ相談	同じ悩みをもつもの同士が、語らうことを通して支援する

教育支援センター（適応指導教室）

不登校の児童生徒を対象に、仲間とのふれあいや体験学習を通して、学校復帰や社会的自立を支援する

(2)　相談員の業務

相談員は面談・電話で、相談者の話を受容的・共感的な態度で受け止めている。相手が問題を相談員に語っていくことにより、自らの考えや感情の偏りに気付き、問題のとらえ方が変化したり問題解決に向けて自発的に動き出したりできるように支援している。

このようなかかわり方は、教師主導型の指導になりがちな学校現場にとって、児童生徒に寄り添う指導法への示唆になると考える。

(3)　事例検討会

教育相談業務室では、面談前後や電話相談後、担当相談員同士で事例の検討をしている。その内容は、相談内容の確認、相談者の気持ちや様子の伝達及び話合い、次回の進め方についてなどである。

また、定期的に事例検討会も行っている。教育相談業務室の相談員参加で行う検討会で、一事例の研究を目的として行われるものである。取り上げられた一事例に対して、様々な角度から話合いをもつ。多くの意見の交流により、担当相談員の資質向上と事例に対する支援の充実を目指している。

この事例検討会から、以下のことが明らかになった。

○　一事例を複数の視点から考えることで、理解を深め、より適切な指導方針・進め方を検討することができる。

○　様々な事例を検討することにより、事例の見方や理解の仕方を学ぶことができる。

○　一事例をめぐる自由な話合いを通して、参加者の共通理解が図られる。

2　群馬大学との事業連携から　みとり2

(1)　事業連携

群馬大学教育学部学校教育臨床センターと連携を進めることは、様々な事例を多面的な角度から分析したり考察したりする力を伸ばすことと考える。教師は自分の枠で考えてしまいがちなため、思考が広がりにくくなってしまうということもある。外部機関との連携は、研究者だけでなく教育相談業務室にかかわる人々の視野も広げ、また専門的な見方も知り、自らの思考を向上させることにもなる。したがって、連携が相談員の資質向上を図るものと考える。

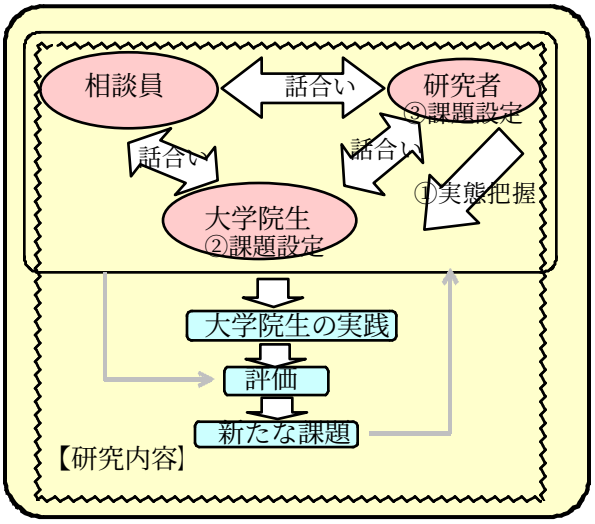
(2)　事例研修･リレー研修会

連携事業の一つのとして行われる計画的・継続的な事例研修会である。事例研修・リレー研修会では、そのときのテーマに沿った相談業務室での事例が取り上げられ、話合いの対象となる。その際、群馬大学助教授、猪股剛先生より、不登校のみとり方や子どもとの具体的なかかわり方などについて、専門的な視点から指導助言をいただく。そこで話し合うことにより、様々な視点から見ることのできる力が培われる。また、今後の事例の方向性を考える場にもなり、次の支援へのステップにつながっていく。

(3)　群馬大学院生への支援

教育相談業務室から得られた研究及び大学院生の児童生徒へのかかわり方の研修が、大学院生の資質向上に役立つであろうと考える。（図３）

図3　大学院生への支援のとらえ



ア　実践場所

・教育支援センター（適応指導教室）
・不登校児合同体験学習
・教育相談業務室での事例検討会参加

イ　実践方法

・事前打合わせ（内容確認、支援方法の話合い）
・教育支援センターの子どもたちへの支援
・相談員への参与観察
・事後の話合い（評価、反省、新たな課題）

ウ　実践の手だて

・大学院生の実態把握（経験、内容）
・課題の設定（大学院生、研究者の支援の課題）
・実践場所の選定
・事前事後の話合い

エ　実践内容

児童生徒のどこに視点を当てて支援したらよいのか話し合った。特に事後の話合いを大切にし、毎回、支援したことにより得られた大学院生の気付きを取り上げてもらった。その際、研究者は、大学院生の発言・気付き・考え・かかわり方を、相談員から得られた気付きの観点やキャッチの仕方と比較検討し、現場の教師にはどんな考え方が必要なのかという視点で考え、分析・類型化した。

オ　検証方法

研究者の大学院生への支援が、その変容を図ることができたかを検証するためには、実践の場の観察だけでなく、毎回の話合いから大学院生の変容した部分を見付けたり、どの支援がその変容につながったのかを分析したりした。また、自身の気持ちのどの部分が、気付きに結びついたかということを明確にした。

そして、相談員から得られた学びと大学院生の変容を比較検討し、分析・類型化して、心理的側面を考える資料集を開発することが、検証につながると考えた。

3　研究の場から得られた学び

(1)　教師の基本的な考え方　学び1

教育相談業務室で実践・研究することにより、具体的な事例に対する相談員の接し方・考え方を知ることができた。それを児童生徒と接する教師に照らし合わせ、かすかなサインに気付くための基本的な考え方に関して、次の観点を得ることができた。

①　相手の内面をよみとる

子どもが学校で不適応を起こし、生活を送るのが苦しくなり始めるといろいろなサインを表出する。今までとは何か違うところ（兆候）＝かすかなサインを感じたら、見落とさずに気にかけることである。「用もないのに側にいるのはなぜか」「着ている服装が変わったがどうしてか」と個々に目を向け、アンテナを鋭くしておくことである。

教師は、毎日児童生徒に接している。また家族や友人関係など背景となる情報も把握している。それらと考え合わせ、「そのようにしかできない心の状態」を理解しようとすることが大切である。子どもの変化そのものにこたえて、すぐ「指導」しようとはせず、表出されたサインで、本当は何を訴えたいのかに耳を傾けることである。

サインは教師へのメッセージであり、「こう指導してほしい」という、かかわりを求める「声なき訴え」であると、とらえることが大切である。

②　繰り返される表現を気にかける

「心配なこと」「不満なこと」など気になっていることがあると、言葉の中に繰り返し出てくる。そのことが原因で、固執してしまう部分があると考える。例えば「成績」が気になっていると、その言葉だけでなく「勉強」「進路」などという似たような言葉が表れる。本人は気付いていないこともあるし、気付きたくないのかもしれない。

つまり児童生徒と接するとき、繰り返し出てくる言葉に視点を置くことで、相手の気持ちに触れることができると考える。

また、教師側にも相手の気になる部分がわき上がってくる場合がある。それは相手の心と呼応していることが多い。自身の中にわき出た気になることを常に心にとめながら接することである。

③　中立的な目で見る

集団で指導することの多い教師にとって、他者との比較で個々の児童生徒をとらえたり、不適切な面ばかりを見てしまったりする傾向になりがちである。また、情報をもち得ているためレッテル張りになってしまうこともある。

しかし、児童生徒は独自の存在であるという基本的な考えを念頭に置いておくためには、日常生活において「できるだけ知ろう」とすることである。それにより一人一人に積極的に関心をもつことができ、様々な側面をできるだけありのままにとらえようという姿勢をもつことである。

ありのままを受け止め、先入観をもつことなく中立的な目で見ることが重要と考える。

④　客観的な目をもつ

教師側の心にゆとりがないと、子どものサインに気付き、働きかけていくことが難しい。「ゆとり」というのは自分の心の状態に気付いていることである。自身が今どんな状態でいるかということを知っていることが、冷静でいることになり、かすかなサインをキャッチできる状態に近づくことになる。

また、自分がどの角度から子どもを見ているのかを自己認識することも必要である。自身の見方・考え方に気が付くということは、自分自身を知り、自身を客観的にみることができるだけでなく、相手を客観的にみることにもつながるのである。

⑤　他者の意見を聞く

自分自身の考えだけでは、迷いも出てくることもあり、偏ってしまうこともある。いつも中立であることができるよう、ほかの教師や指導者などの意見を聞くことである。他者の感想やコメントは、教師対児童生徒という二者関係の状態から、自身を客観的にみる視点を提供してくれる。当たり前のことではあるが、自分と相手との関係は見えにくいが、他者と相手との関係は比較的よく見えるものである。柔軟性のある第三者としての目を、他者から手がかりとして得ることができると考える。

それには他者の意見を聞き入れる姿勢をもつことである。

⑥　きめ細かな接し方をする

児童生徒とかかわるとき、きめ細かな支援をすることが大切であると考える。個々により性格・性質やその背景が異なり、教師はそれらを把握することができるため、その個人の事情を理解したかかわりができる状況にある。どのような支援の仕方が合うのかを考えながら、かかわっていくことが大事である。それには、日ごろから、触れ合う機会をつくることである。

また、全体的にみるのか焦点を当ててみるのかも見極めることである。そのためには、相手に寄り添うことから始めることが大切になる。

(2)　心理的側面のよみとり　学び2

児童生徒のかすかなサインに気付くためには、前ページの(1)の教師の基本的な考え方で接することであるということが分かった。それにより、表現された変化をキャッチすることができると考える。

そして様々な情報とも考え合わせ、そうせざるを得なくなった内面に目を向け、いろいろな心理的側面を勘案することが大切であることを理解した。さらに考え出された心理的側面を類型化することにより、より内面に近づけるということを学ぶことができた。

そこで、研究の場から得られた事例を使って、現象から考えられるいろいろな心理的側面の一例を、表４にまとめて示す。

表4　心理的側面のよみとり(例)

○　髪･服装などの外見の様子が変化してきた

（例）・女子中学生が、Ｔシャツの上に男物のネクタイを締めてきた
・中学生が、会話をするとき自分のことを「オレ」と呼ぶようになった

例えば考えられる心理的な側面

・女子の思春期は、そういう時期があると考えられる
・女性としての自分の性を受け入れにくいと考えられる

○　攻撃的な様子を表現する

（例）・みんなの前で動植物に攻撃的な行動（虫をつぶす、花をとる）を表す
・戦いの様子や残酷な場面を絵や形に表現する

例えば考えられる心理的な側面

・内面に秘めた怒りや対立が行動となって表れている

○　どの友達にも教師にもいい顔をする

（例）・どのグループにも入り、みんなと話を合わせている
・一緒にいる友達のこっちの話にもあっちの話にもあわせた言葉を返していた

例えば考えられる心理的な側面

・嫌われたくないように自分を守っている

○　活動中、止まってしまったりできなくなってしまったりする

（例）・自分でしようと思っているが、直前にできなくなってしまったり体調不良になってしまったりする
・体育の時間ハードルを跳ぼうとするが急に止まり跳べなくなってしまった

例えば考えられる心理的な側面

・弱い部分を見せたくないために自分を守っている

(3)　資料集　学び2からの広がり

また、前ページの表４を応用し、学校で活用できる資料集（問題集）を開発した。この資料集は、柔軟な思考力を養うものである。

次の資料１は、その代表例である。（詳細は、Web参照）

資料1　代表事例

この資料集については、以下の留意点があげられる。

①　正解・不正解はない

この資料集に表記されたよみとり方は、正解・不正解というのではなく、表面上の言動・行動から多面的にとらえたもので、その心理的側面をよみとろうとしたものである。このように心の奥にせまった見方を知ることも大切である。

②　多面的な見方・考え方を知る

考えられる心理的側面は、児童生徒の様々な背景により、それぞれ異なるため、一概にまとめられるものでない。また、よみとる側も、年齢・性別・生活・経験など異なるので、よみとり方もそれぞれである。「こういうよみとり方もある」と知ることが必要である。

Ⅳ　本研究から得られたこと

1　「サインをキャッチ」に視点をあてた教師の在り方

(1)　考えながらかかわる

教師の中には、サインをキャッチしたいが「なかなかできない」「視点が分からない」などということがある。視点を当てる部分はどこかということを考えるのではなく、自分がどんな気持ちで接することがよいのかと常に考えながら接していくことが、サインのキャッチにつながることと考える。つまり、自分自身に問いかけながらかかわることが大切である。

(2)　変化を気にかける

「あれ、いつもと違うぞ」という非言語サインを感じ取ることが大切である。感じ取ることが、言語や行動に表れない内面を知る手がかりとなる。そして、教師自身のその感覚を大切にし、気にかけることである。

(3)　心理的側面に視点を当てる

表れたサインに気付いたなら、サインそのものに視点を当てて考えるのではなく、「どうしてそうなのか」「そうせざるを得ない」心理的側面に視点を当てて熟考することである。そのとき、教師は中立的・客観的状態でいるようにすることである。

(4)　多面的に考える

そのサインからよみとれるいろいろな心理的側面を考えることが大切である。児童生徒の背景には様々な要素が含まれているため、多様な側面が考えられる。多面的に考えることが、視野を広げ柔軟性を養い、児童生徒の心の内面にせまることにつながるのである。

2　サインをキャッチするための具体的なポイント

さらに、かすかなサインをキャッチするための具体的なポイントとして、以下の３つがあげられる。児童生徒とかかわるとき、これらのポイントを頭に入れておきながら接すると、それを手がかりとして、心をとらえる入り口となると考える。

問題行動サインをキャッチするための
3つのポイント

ポイント1　：　心理的側面に視点を

外見（服装・髪型・持ち物など）、表情、態度、作品、友達関係など、言葉ではないサイン、

つまり非言語的サインに、まず気付くことである。今までとは何か異なるところを感じとることである。そして、それを気にかけることである。

次に、気にかけて「どうしてそうなのか」と考えるようにする。そのとき大切なことは、サインそのものに視点を当てるのではなく、「そうせざるを得なくなった**心理的側面**」に視点を当てることが大切である。

児童生徒からの非言語的サインは、心の揺らぎを表すものととらえることが重要と考える。

ポイント2　：　繰り返される言葉を

気になっていることがあると、会話の中に同じような言葉が繰り返し出てくるようになる。本人は、気になっている部分に気付いていないこともある。又は、気になっているが認めるのを避けたり認めようとしなかったり認めたくなかったりする場合もある。しかし、気になる言葉は何らかの言語で繰り返されるので、そのことに視点を当てて聴くようにすることである。

繰り返される言葉（キーワード）に気付くことは、子どもの内面を知る近道となると考える。つまり繰り返される言葉は、子どもの心の扉を開ける鍵なのである。

ポイント3　：　気になるものを

不登校児童生徒の多くは、気持ちの中に「ひっかかるもの・気になるもの」をもっている。そう考えると、その前兆にある子どもも、どこか「**ひっかかるもの**」をもつていると考えることができる。何にひっかかっているかということは子どもによって異なるが、そのことで心が揺れているということを理解しておくことが大切である。

教師がそういう気持ちで接していると、教師側にも「あれ、何か感じるものがあるぞ」という思いが出てくる。つまり、「**気になるもの**」が教師自身にもわき上がってくるのである。そのわき上がったものを常に気にかけることが大切なのである。

それらの「気になるもの」は、児童生徒理解の糸口となる場合がある。

3　かすかなサインをキャッチするときの留意点

サインをキャッチするとき、次の点に注意し、頭に入れておく必要がある。

①　非言語的サインはあくまでサインであってそれだけを手がかりにして全てをよみとれるわけではない。

②　サインをキャッチしようとするあまり、表面に表れた言動・行動ばかりを観察するようになってしまわないようにする。

③　サインをキャッチでき、その内側をよみとるとき、表面上の行動だけをとらえて一方的な見方をしてしまうことのないようにする。

④　個人には、言動・行動に癖やパターンがあるので、それを見極め、それに惑わされないことである。

上記のことに心がけながら、児童生徒のサインをよみとるようにすることが大切である。

Ⅴ　まとめと今後の課題

1　まとめ

研究の結果、以下のようのことが分かった。

○　かすかなサインをキャッチするためには、児童生徒の非言語的サインに目を向け、「そのようにしかできない」心の状態を理解しようとする姿勢を身に付けることが必要である。また、非言語的サインから感じ取った教師自身の中に出てくる「気になる」という思いをもちながらかかわっていくことが大切である。

○　児童生徒と接する教師は、多面的・柔軟性のある見方・考え方をもつことが大切である。様々な情報とも考え合わせ、いろいろな心理的側面を勘案することが、児童生徒の内面に近づくことになり、ひいては適切な児童生徒理解と早期対応につながると考える。

○　学校では、個々の背景を把握することができる。その個人にとってどのような支援のしかたがよいのか考えながらかかわっていくことが大切である。そのためには、日ごろから児童生徒と触れ合う機会をつくり、相手に寄り添う接し方を心がけていく必要がある。

2　今後の課題

今後の課題としては、以下のことがあげられる。

○　かすかなサインをキャッチするための考え方についての学びは得ることができた。今後、児

童生徒の内面に、より一層近づくためには、児童生徒の発するそのサインが何を意味するのか、そのサインによりその子は何を言おうとしているのか、何を求めているのかということを教師自身、研さんする必要がある。

○　学校には、多くの情報がある。また教師の仕事量も多い。そういう状況で、児童生徒のサインを早期にとらえるためには、個人のどの情報が児童生徒の理解に適切であるのかを判断する力を養うことが必要である。また、教師自身、自己理解の大切さを深め、客観的・柔軟性のある見方を磨くことが必要である。

〈主な参考文献〉

・小澤　美代子　著　『上手な登校刺激の与え方』ほんの森出版（2004）
・菅野　純　編著　『問題行動へのアプローチ』開隆堂出版(2003)
・渡辺　美枝子・橋本　幸晴・内田　雅顕　編『学校に生かすカウンセリング』ナカニシヤ出版（2004）
・市毛　恵子　著　『カウンセラーのコーチング術』PHP研究所(2005)
・小林　正幸　著　『不登校の子への援助の実際』金子書房(2005)
・佐藤　郁哉　著　『フィールドワークの技法』新曜社(2004)
・群馬県総合教育センター『不登校問題課題解決支援資料』（2004）

（担当指導主事　武藤　榮一）